中世百首歌

六

井上宗雄
田村柳壹
編

古典文庫

中世百首歌

六

井上宗雄
田村柳壹
編

古典文庫

古典文庫第四八九冊

昭和六十二年七月二十日印刷発行　非売品

中世百首歌
六

編者　井上宗雄
　　田村柳壹

発行者　吉田幸一

印刷者　白橋印刷所

発行所　114
東京都北区西ケ原
三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話（九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

© KOTEN BUNKO, 1987. Printed in Japan

目次

一　西行法師百首和哥（西行恋百首）……七
二　詠百首和哥（守覚法親王）……一九
三　順徳院御製百首和歌鈔……三一
四　蓮性法師百首……一三七
五　春日陪社壇同詠百首和謌（津守国冬）……一四七
六　鹿百首（為兼）……一六五
七　詠百首和歌（尊円）……一八五
八　詠法花経百首和哥（尊円）……一九七

九　冬日同詠百首和歌（藤原雅家）……二一九
一〇　宋雅百首……二三九
一一　詠百首和歌（快明）……二四七
一二　草庵集百首和歌……二六五
一三　詠百首和謌（春栄丸）……二八五
解　題……二九七
初句索引……三四一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

凡　例

一、「中世百首歌」は次の要領によって翻刻刊行する。

(1)　平安末期から江戸ごく初期（慶長頃）までの個人百首を原則とする。

(2)　比較的披見・入手しやすい左記叢書所収のものを除く。

「群書類従（正続）」　「私家集大成」

但し右所収の百首でも、異本関係にあるもの、また右所収の百首が必ずしも善本でなく、他に善本・原本・古写本等の類がある場合は収める。

(3)　ある契機によって複数歌人がそれぞれ百首歌を詠じ、それが一括されて定数歌集となっている場合（例えば正治百首や着到歌会歌集など）、また形態的に百首歌でないもの（例えば個人百首を基にして成立した千五百番歌合など）は除くが、その中の個人百首が独立した伝本として存し、かつそれが善本・異本（原本・草稿本・完成本の類）であるような場合は収める。

(4)　定数歌が私家集の一部であるもの（私家集の一部に百首として存在するも

の。例えば拾遺愚草・草根集中のもの）は除くが、百首歌が集積されて家集となっている場合で、(2)に未収のものは収める。

(5) 偽書・仮托と目せられる百首（例えば鷹百首の類）は伝承作家のものとしては扱わず、中世成立のものについては将来の課題として考え、ここでは除いておく。

(6) 以下、同じ流派の人々や、ほぼ同時期の百首をまとめて一冊として刊行する。本冊には主として鎌倉・南北朝期のもの（若干存疑のものを含む）を収めた。

二、翻刻は次の方針で行った。

(1) 漢字・仮名の別、仮名使い、送り仮名などはすべて底本のままとしたが、漢字は常用字体あるものはそれに、変体仮名は通行の字体に改めた。

(2) 私注はすべて（　　）に入れて示した。

(3) 底本で一首が二行（またはそれ以上の行）書きの場合は、改行の部分を一字あきとした。

(4) 十三の百首歌をほぼ成立順に配列し（但し存疑の三種は末に置いた）、一つの百首ごとに漢数字で番号を与え、それぞれに歌番号を算用数字で施した。

(5) 二は仁和寺本、三は国会図書館本、四・六・一〇は書陵部本、五は京大図書館本、七は高松宮本、八は国立公文書館内閣文庫本、九は河野信一記念文化館本、一一は島原図書館松平文庫本、一二は龍谷大学図書館本、一三は宮城県図書館伊達文庫本を底本とした。翻刻を許可された上記各図書館とその職員の方々に厚く御礼申上げる。なお翻刻に当って谷山茂・大取一馬氏に多くの御教示・御便宜をえた。深謝の意を表したい。

(6) 本書の性質上、校異を詳しく加えることはしなかったが、底本の誤脱等が他本によって大きく意味の変る所に限り、校合本のある場合はそれによって校異を加えた。校合に用いた本、校異のつけ方は、それぞれの解題を参照されたい。

三、解題は基本的な事項を示すに止めた。

四、初句索引を添えたが、索引の冒頭に凡例を記したので参照されたい。

昭和六十二年三月

井上宗雄
田村柳壹

一　西行法師百首和歌（西行恋百首）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

西行法師百首和哥

聖(笙)の岩屋の冬こもりはさえにけれは又都の方に出て同行の衆寺にたゝすみける時宣旨なりて恋の百首よみまいらすへしと侍りけれはおもはすのおほせにては侍りけれとも仰くたされけれはいなみ申(ひか)へきにあらねは百首よみ侍りける

恋

1 つゝめともなみたの色にあらはれて　しのふおもひは袖よりそちる
2 わりなしや我も人めをつゝむまに　しゐてもいはぬ心つくしは
3 中〳〵にしのふけしきやしるからん　かゝるおもひのならひなき身は
4 けしきをはあやめて人のとかむとも　うちまかせてはいはしとそ思ふ
5 心にはしのふとおもふかひもなく　しるきは恋のなみたなりけり
6 色に出ていつより物をおもふそと　とふ人あらはいかゝこたへん

7 あふ事のなくてやみぬる物ならは　いまみよ世にはありやはつると
8 うき身とてしのはゝ恋の忍はれて　人の名たてになりもこそすれ
9 みさほなる泪なりせはからころも　こひすと人にしられましやは
10 歎きあまり筆のすさひにつくせとも　思ひはかりにいはれさりけり
11 我なけく心のうちのくるしさを　何にたとへて君にしらせん
12 今はたゝしのふこゝろそつゝまれぬ　なけかは人のおもひしるとて
13 心にはふかくしめとも梅のはな　おらぬにほひそかひなかりける
14 さりともとほのかに人をみつれとも　おほえぬゆめのこゝちこそすれ
15 いかにせんその五月雨の名残より　やかてをやまぬ袖の雫を
16 さる程の契りは君にありなから　ゆかぬこゝろのくるしきやなそ
17 今はさはおほえぬ中になしはてゝ　人にかたらてやみねとそ思ふ
18 折人の袖にたまらぬ梅の花　たかうつりかにならんとすらん
19 うたゝねの夢をいとひし床の上に　けさいかはかりおきうかるらん

20 引かへてうれしかりけるこゝろかな　うかりし事は忘れさりけり
21 おなしくはうへをきしよりしめ置て　人にとらせぬ花とおもはて
22 朝露にぬれし袖をはほすほとに　やかて秋たつわかこゝろかな
23 待かねて夢にやみるとまとろめは　ねさめすらんか荻のうは風
24 つゝめとも人しるこひや大井川　井せきの隙をくゝるしら波
25 あふまてのいのちもかなと思ひしは　くやしかりけるわかこゝろかな
26 今こそはあはてはものを思ふとも　のちうき人に身をはまかせし
27 いつかはとうらみし事のねたきかな　おもひしらすとうとみきかせは
28 袖のうへに人目しくれし折まては　みさほなりけるわかなみたかな
29 あやにくに人もしらぬなみたかな　たえぬ心にしのふかひなく
30 あはれとて人のこゝろの情あれな　かすならぬにはよらぬなけきを
31 いかにせんうきなを世にはたてはてゝ　おもひもしらぬ人のこゝろを
32 忘られん事をはかねておもひにき　なにおとろかす涙なるらん

33 とはれぬもいはぬ心のつれなさも　うきはかはらぬこゝろ也けり
34 つらからん人ゆへ身をはうらみしと　おもひしかともかなはさりけり
35 今さらに何とは人もとかむへき　はしめてぬるゝたもとならねは
36 なかめこそうき身のくせと成はてゝ　夕くれならぬ折もわかれぬ
37 なそもかく事あたらしく人のとふ　わか物おもひふりにしものを
38 しなはやと何おもふらん後の世も　こひは世にうき事とこそきけ
39 わりなしやいつを思ひの□[本ノ]□[本ノ]にて　月日ををくる我身なるらん
40 なつかしく君か心の色を□[本ノ]て　露もちらさて袖につゝまん
41 いくほともなからふましき世の中に　ものをおもはてふるよしも哉
42 いつか我塵つむ床をはらひあけて　こんとたのめし人を待へき
43 心からこゝろに物をおもはせて　身をくるしむる我身也けり
44 ひとりきてわか身にまとふから衣　しなしとこそはなきぬらしけれ
45 いひいてゝうらみはいかてつらからん　おもへはうしや人のこゝろは

46 なけかるゝ心のうちのくるしきを　人のしらはや君にかたらん
47 人しれぬ涙にむせふ夕くれは　引かつきてそうちふされける
48 おもひきやかゝるこひちに入そめて　やるかたもなくなけきせんとは
49 あやうきに人こそつねによかれける　岩のかけはしほらのかけ道
50 しらさりき身にあまりある歎して　つきせす袖をしほるへしとは
51 むなしくやゝみぬへきかな空蟬の　このみからにておもふこゝろは
52 つゝめとも袖よりほかにこほれ出て　うしろめたなき涙也けり
53 我なからうたかはれぬるこゝろかな　ゆへなくそてのしほるへきかは
54 さもこそは人めおもはすなりはてめ　あなさけにくの袖の雫や
55 はつかしく沢の小芹のねを白み　きよけに物をおもはすもかな
56 いかさまに思ひつゝけてうらみまし　ひとへにつらき君ならなくに
57 恨みてもなくさみなまし中〳〵に　つらくも人のあはすと思はし
58 何事につけても世をはいとふへき　うかりし人そ今はうれしき

59 あふと見しその夜の夢のさめてあれな　なかきねふりもうかるへけれは
60 あふことの夢なりけりとおもはすに　こゝろのいまはうらめしきかな
61 あふと見る夢を限れる現にて　さむる別のなからましかは
62 夢にのみおもひなさるゝうつゝこそ　あひみる事のかひなかりけれ
63 つらくともあはすは何のならひにて　身のほとしらて人をうらみん
64 さらはたゝさらても人のやみなまし　さて後もさはさはあらしとや
65 数ならぬ心のとかになしはてゝ　しらせてこそは身をもうらみめ
66 何となくさすかにおしきいのちかな　ありへは人のおもひしるとて
67 何ゆへにけふまて物をおもはまし　いのちにかへてあふ世なりせは
68 中〳〵になれぬ思ひのまゝならは　うらみはかりや身にとまらまし
69 何せんにつれなかりしをうらみけん　あはすはかゝるなけきせましや
70 身のうさのおもひしらるゝことはりに　をさへられぬはなみた也けり
71 何にこはかすにもあらぬ身のほとに　人をうらむるこゝろ也けん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton